

シンポ「アジアの新世代女性監督からの提言」会場沸き 30分延長!!

昨日、午後4時30分から開催されたシンポジウム「アジアの新世代女性監督からの提言」では、「今、このままがいい」(韓国)のプ・シヨン監督、「チベットの音調」(中国)のチャン・ルイ プロデューサー、ソウル国際女性映画祭のイ・ヘギョン ディレクターの3名がパネラーとして参加。

チャン・ルイさんは、中国の映画界の状況と女性監督の地位に

ついて、「国内の映画は発展しています。映画館には一、二週間に一度行きますが、チケットが買えないこともままあります。また、女性監督の地位は向上している数も非常に多く、2、3割はいます。」と説明。

プ・シヨン監督は、「韓国では公的な映画支援予算が減る中で、自主制作の低予算映画が活発化しています。女性監督も増えており、商業ベースで活躍する女性監督はだいたい30名くらいで、制

作スタッフは40%くらいが女性が占めると思います。」と状況を説明。

イ・ヘギョンさんは、映画教育について、「韓国の監督には人文学、社会学などを学んだ人たちが多くいます。映画制作に携わるにはいろいろなことを勉強する努力はもちろんのこと、テクニックやメディアに通じることも必要です。」と語りました。

コーディネーターの当映画祭木全ディレクターは、「日本では商業ベースの女性監督は6、7%に過ぎず、映画教育の環境も中国や韓国と比べ立ち遅れている。近年は、短編作品の制作者が増えてきているので、今後、こうした女性監督の支援が重要。」と指摘。

また、参加者からの「家事と仕

事の両立はできていますか。」との質問に対し、プ・シヨン監督は、



「精神的な負い目はありますが、母や周りの方々をお願いして育児をしています。私は周りの方々の支援のおかげで今仕事をしています。」と笑顔で答えました。

質問が後を絶たず、名残惜しい雰囲気の中、予定時間を30分近く延長して閉会しました。



映画祭2日目 ゲスト7名を迎えトーク盛り上がる

昨日、映画祭2日目は、「チベットの音調」始め4作品のゲストトークがあり、監督やプロデューサー7名が登場。

会場の熱心な観客からの質問にも、自国の実情などを交えながら、親切に答えていました。

▼「チベットの音調」

ゲストトークには、チャン・ルイプロデューサーとチャオ・ダーシンプロデューサーの二人が参加。

険がありました。実際に撮影中に事故も起こりました。ですが、あれほどきれいな所なので、仏様の守りがあったのか人命に関わる事故には至りませんでした。」と苦労話を披露。

また、ジャオさんは、「チベットで音楽は非常に重要な役割をしていて、様々な目的をもったたくさんの種類の音楽があります。この映画を見れば、チベットに関して、特に音楽については全面的な理解が得られると思います。」とチベット音楽の魅力を紹介。

国内で受け入れるというよりは、国外へ追い出そうとする風潮がありますが、『難民』という小説を読んで、そうしたデンマーク社会を反映している重要な話だと思いました。またジャーナリズムの話でもあり、女性ジャーナリストが重要な役割を果たしていました。」と作品制作のきっかけを紹介。

モーテン・カウフマンさんは、「何よりも大事なものは(監督と)馬

とがあるのですが、「かんじゅく座」を立ち上げたときにもおもしろい題材になりそうだったので、初めからカメラを入れて練習風景から撮影していました。」と作品制作の経緯を紹介。



また、「今の高齢者の方は元気な方が多く、「もっとやりたい!」というガッツを持っています。なので、1回の練習で1回寝、プレッシャーも与えるというような接し方をしています。」と撮影のコツを披露。

今後については、「本業は役者がいいと思っていますが、そのとき表現したいスタイルで表現すればいいのではないかと思います。「かんじゅく座」のみなさんが演劇を始めて人生の再スタートを切っているところを見ると、「もう一回がんばらなければ!」と思うことができ、最近役者への復活も果たしています。」と抱負を語りました。



チャオさんは「チベットは非常に美しく神秘的なところなんです。この60年でこの町は非常に大きな変化を遂げてきています。チベットは人があまり行かない、知らない場所です。そういう場所を世界の皆さんに伝えたいと思ってこの映画を作りました。」と制作のきっかけを説明。

チャンさんは、「チベットは海拔がとても高く、高山病になる恐れがあったので、撮影の間には酸素の吸入を繰り返し行いました。また、道が曲がりくねっているの

で、冬は凍結して滑ったりする危

▼「エスケープ」

カトリーネ・ヴィンフェルド監督が、「私たちが人間としてお互いにどのように助け合うことができるのか。富めるものも、そうでないものも、どのようにしたら助け合うことができるのかということをお互いに見て感じてもらう必要がある。」と上映前に舞台あいさつ。

上映後のゲストトークでは、監督から「デンマークでは、難民を



が合ったということです。彼女とは別の仕事を以前一緒にしていて、息があったので、彼女が長編をとるときには僕がプロデュースすると約束していた。また、彼女は素晴らしいテレビシリーズを作っていたし、彼女が良い長編映画を撮ることは明らかだったので、私の決断は容易なものでした。」とプロデューサーを引き受けたいきさつを語りました。

▼「つぶより花舞台」

鯨エマ監督は、「以前にも一度ドキュメンタリーを制作したこ

※「今、このままがいい」のゲストトークは、初回と内容が重複するため、デイリーニュース vol2 を参照ください。

本日の上映作品&来場ゲスト

※詳しくは映画祭オフィシャルカタログ(1部¥500)をご覧ください。

▼生きていく日々



香港とってま予想するのは、ヴィクトリア湾に面して浮かぶ「百万ドルの夜景」と言われる壮観な高層ビル群の眺めだろう。ニューヨーク・マンハッタン地区のアジア版といったところで、英国統治時代の置き土産として、なおもファッション、グルメ、エンターテインメントの一大拠点としてのプロフィールを誇る。

だが、郊外にできた新興の巨大団地では、大都会の繁栄と興奮、華やかさとは何の接点もない、名もなき庶民の日常が淡々と続いている。より身近に感じられるのは、「中国」との融通だ。同じ高層建築でも、無機質で廉価な住宅群としてのそれには、「香港人」から「中国人」に変わりつつある人々の微妙な心理が投影されているかのようだ。

その中で、貧しい母子家庭の主クワイも、隣人の独居老女も、中心部には生きられない社会的弱者どうし、純粹に「香港人」どうしとしての絆を確かめ合い、支え合って暮らしている。彼女たちは名もなき市民であっても、まざりもなく香港人の成功を支えてきた草の根の貢献者だ。

▼とらわれの水



女性であることは、自分の意思で生きる権利はそもそもなく、他者の利益に奉仕するために生きる義務を意味し、それが全うされなければ「不吉な存在」として断罪の犠牲となる。そんな残酷な因襲は21世紀の世界でもなくなっていない。

インド社会に古来ある幼児婚や寡婦に対する差別や虐待、西アジアや中東地域に多い婚外交渉者に対する名誉殺人、地域を問わず年齢差の著しい男性との強制結婚や人身売買などもそうである。しかもこれらは、身内の経済的救済や世間体のためであり、伝統と神の名のもとに行われることで正当化される。

幼いチュイアも美しいカリヤも、伝統

と神が寡婦に課す掟に服従し、隔離された収容施設でいつか死ぬ日が来るのを待つだけの運命にある。

▼私を撮って



2人組のドキュメンタリー作家が、新作を撮ろうという話である。「映画を撮るといふ映画」は、これまでもあり、いちば有名なのは、イタリアの映画監督フェデリコ・フェリーニの「81/2」であろう。これは新作の「劇映画」を撮ろうとする大監督の話で、紆余曲折する壮大な話だったが、「私を撮って」は、ドキュメンタリー映画を撮ろうとする話なのである。

当初の被写体は、映画関係の仕事をしているあるカップル。夫は俳優、妻は映画の編集者。子供も生まれ、生活自体は苦しいかも知れないが、まああの人生を撮るつもりだったはずである。ところが夫は、家庭生活がニガ手だったのだから、早々に家を出てしまい、なんと新しい恋人を得るといふ展開である。残された妻は、いったいどう行動するのか。

(小藤田千栄子 映画評論家)

▼あした天気になる?～発達障がいのある人たちの生活記録～



私は3年前に「無名の人～石井筆子の生涯」を創った。この映画は、あいち国際女性映画祭に新しく創設された第1回目の「観客賞」という名誉ある賞をいただいた。「無名の人」は、明治の時代に、女性の自立と知的障害者の人権擁護に生涯をつくした女性の物語であるが、その上映活動を進める中で、「歴史もいけれど、現在の障害理解に繋がる映像を」という声があり、特に、障害のあるお子さんのいる親御さんたちから数多く寄せられたことが、今回の製作のきっかけになった。

彼らの多くは雇用の場をはじめ、地域社会からもはじき出され、孤立した環境の中での親子心中や虐待といった人権侵害も

後を絶たない。そうした中で、家族は『親亡き後』への不安や悩みを様に口にする。特に、重度の発達障害のある人たちはコミュニケーションのとりにくさからくるストレスが、ときには激しい行動障害となって顕れることが珍しくない。だが、いざ取材をとると、プライバシーの問題が前面に立ちほだかり思うようにことは進まないのが現実である。

(宮崎信恵 監督)

宮崎信恵監督

1942年、東京生まれ。東映教育映画部にて編集助手を経てスクリーンライターとなり、1973年、短編教育映画「愛のかけ橋」を監督。その後、障害者、高齢者の問題に視点を当てたドキュメンタリーを多数手がける。2006年「無名の人～石井筆子の生涯～」であいち国際女性映画祭第1回観客賞を受賞。他代表作に「風の舞 間を拓く光の詩」(03)など。



▼空とコムローイ～タイ、コンテップ村の子どもたち～



私が、日本から遠く離れたタイの最北端、メーサイにある、この施設の人々に出会ったのは8年前のことでした。その頃、私は会社員として、あくせくした日々を送っていました。たまたま、この施設を訪れ、ここで暮らす子供達を見ていて、「私達はただ生きているだけでいい。自分よりこんなことができるか、一番になろうとしなくても、ただ生きている事が、かけがえのないことなのだ」という実感がふとわいてきたのでした。

子供達の故郷の村には学校がないので、学校に通うため、とても小さな子供達が、親元から離れて共同生活をしているのですが、自分ができることを探して働き、隣にいる友達のこととも思いやっている。それは、物質的な豊かさばかりを求め、自分のことだけで精一杯になっている先進国に暮らす私達が、置き忘れてきたもののように思えました。そして、子供達の笑顔、子供達の毎日に接して、「隣人と共に生きる」という心が、ひしひしと伝わってきました。(三浦淳子 監督)

三浦淳子監督

1960年、横浜生まれ。早稲田大学、多摩美術大学卒。1992年「トマトを植えた日」がイメージフォーラムフェスティバル大賞受賞。1997年「孤独の輪郭」がパリ、ボンビドーセンター主催の映画祭シネマデュレル、釜山国際映画祭、横浜美術館などで上映される。2000年よりタイ山岳民族の子供達の映画撮影を始め、08年、本作を完成させる。



▼ブライアンと仲間たち パーラメント・スクエア SW1



この映画は、私の記念すべき初監督作品です。2007年4月に留学のためイギリスに渡った私は、ロンドンを観光していて偶然、この映画の主人公であるブライアン・ホウのテントを国会前の広場に見つけました。「7年近くテントを張って生活しながら反戦活動をしている」と平然と言う彼に驚き、好奇心からカメラを回し始めました。その時は、まさかこれが2年後に映画となって完成するとは考えてもいませんでした!

カメラを回すといっても、留学直前に家庭用の小型ビデオカメラを購入したばかりで、それまでに撮ったものといえば友達の誕生日パーティー程度。映画を撮ると決めてからは、街中で演説やパフォーマンスなどしている人を見つけてはインタビューを取らせてもらったり、路上で取材をしているBBCなどのメディアクルーを見つけては、「メディアの学生だ」と言って取材方法を見学させてもらったりして、撮影技術を学んでいきました。(早川由美子 監督)

早川由美子監督

1975年、東京生まれ。成蹊大学法学部、London School of Journalism卒。公務員、会社員を経てジャーナリストを志し2007年に渡英。ロンドンでジャーナリズムを学ぶ傍ら独学で映像製作を始める。2007年5月にブライアン・ホウ氏らの活動に出会い、約1年半にわたって取材・撮影し、初監督となる本作を完成。2009年度日本ジャーナリスト会議(JCJ)新人賞受賞。



◆今日・明日のチケット情報/日にち、会場、売行き状況(○余裕有、△残少、×完売)、作品名(上映時間)

○9月4日(金)
⇒ウィルホール
○「生きていく日々」(10:00)
○「とらわれの水」(14:00)
○「私を撮って」(19:00)

⇒大会議室
○「あした天気になる?」(10:00)
○「空とコムローイ」(14:00)
○「ブライアンと仲間たち」(18:30)

○9月5日(土)
⇒ウィルホール
○「赤い点」(10:00)
○「ぐるりのこと。」(14:00)
○「子供の情景」(18:30)

⇒大会議室
○「台湾人生」(10:00)
○「エスケープ」(14:00)
△「つみきのいえ」(18:30)
⇒レストラン Will
×交流パーティー(18:30)